



新潟産業大学 地域に学び、地域をおこす
Niigata Sangyo University

2025年度地域理解ゼミナールⅣ 合同発表会

地域文化分野 発表者：全員

発表テーマ

「地域経営を巡る困難克服と文化」

担当教員：小林健彦

2026.1.22



市内西本町 石井神社の石の鳥居

石製鳥居が破損しているのは、平成19
(2007)年7月16日に、新潟県上中越
沖(震央東経138.365、北緯37.3
34、マグニチュード6.8)を震源として
発生した、新潟県中越沖地震に依る被害であ
る

学習項目 目次

- はじめに 課題の提起 地域社会経営を巡る困難克服と文化
- 無常観と日本人
- 震災遺構と地域社会
- 新潟県中越沖地震と教訓の風化
- 情報伝達における「～の日」の方法論
- 新潟県柏崎市の「荒浜」研究
- 柏崎の町方としての本町の来歴
- 災害由来地名としての荒浜と松波
- 柏崎地域の地形図を読み解く
- おわりに 柏崎地域の形成と困難克服の経緯

・日本列島は、南北に長く横たわり、その面積の割には、海岸線、湖岸線、河川沿岸線等、水面に接する距離が比較的長い、という特性を持つ

・ ここでは、古来、様々な災害が発生し、その度に住人は被災し、又、繰り返してそこよりの復旧、復興に当たって来た。

文責 新井達也

文字認知と災害情報伝達

- 日本周辺地域の地震については、一定の周期性や活動期が存在する可能性が指摘されている。
- しかし日本への漢字伝来以降に在っても、近世以前の段階では文字認知率の低さに拘わる問題があり、災害記録は限定的なものとなっている。
- 御伽草子、奈良絵本により文字認知ができない人にも、地震の情報は共有されていた。

文字認知と災害情報伝達

- 江戸時代以降、地震記録が増加したのは江戸周辺への被害による影響が全国へ波及していったから。
- 過去の震災を契機とし、神仏への祈祷や災異改元が実施され、地震勘文や占文が作成されていたこともあり、文化的対応がとられていたことがわかる。
- 当時の神仏への祈祷や災異改元は当時の社会に在っては科学であり最先端技術であると見做されていた可能性もある。

- 震災発生直後に於いて、中国、日本の古文献を渉猟して作成されていた
- 根拠の無い未来予想図が、仏教思想上の1つの特徴である処の三時の説、所謂、釈迦入滅後に於ける末法思想の、鎌倉時代後期以降に於ける衰退
- 保立道久氏は、特に、地震と火山噴火とは、原初のエネルギーに満ちた、畏怖すべき対象としての地霊が地上に噴出した姿であるとし、9世紀に成立した神道の基底には、こうした火山と地震に対する畏敬、又、絶対的な「忌み」があったと指摘する。

- 前四史の「後漢書」に依れば、後漢の張衡〔平子、建初3年（78）～永和4年（139）〕は、陽嘉元年（132）には「候風地動儀」、つまり、感震器を世界で最初に製作したとされる
- 後漢一代記である「後漢書」は、原著者であったの曄（はんよう）死去後に於いて、梁の劉昭が晋の司馬彪に依る、「続漢書」八志に註し、補完して完成したものであって、張衡の時代より、凡そ300年後に成立した記録である点に、留意をしなければならない。

東日本大震災と「浪分けの論理」

- 東日本大震災以降、歴史的資料から過去の被害を検出し、防災、減災への応用を目的とした研究が進展
- 発生当時の人々の対処という文化的な視野は主流研究に付随したものであった
- 「災害対処の文化史」という視角よりの追求

浪分けの論理

- どのような文字情報以外の（文化論的）対処法を試みようとしていたのかを研究すること
- そこには日本の歴史過程に於いて蓄積、形成され、人々によって育まれた日本文化が災害対処の基底に色濃く反映

文化論の構築につながりを得る

震災遺構と地域社会

テキスト P187~P191



- ・震災遺構とは、津波などの災害によって被害を受けた建造物や施設を保存したもの。
- ・これらは、災害の記憶を後世に伝えるための文字情報以外の手段として位置づけられている。
- ・実際に被災した建造物を見る事によって被災者達は心理的負担も関わることから肯定的・否定的な意見もある。
- ・震災遺構と地域社会において、同様の被害を繰り返さないために必要な役割をしている。

新潟県中越沖地震と教訓の風化

テキスト P187~P191



- ・震災は時間の経過とともに人々の意識の中で薄れていく。
- ・特に、被災の跡や震災遺構といった「形あるもの」が残されていない場合、災害の経験は個人の記憶に依存しやすくなる。
- ・文字情報だけで震災の深刻さを実感しにくく、教訓の風化を招くことを示唆されている。

新潟県中越沖地震と教訓の風化

- 2007年7月16日午前10時13分に新潟県中越沖地震が発生した。
- 被災した喬柏園を改修し、「かしわざき市民活動センター」に併設する形で「中越沖地震メモリアル」を「まちから」として整備している。
- この施設は、中越沖地震復興基金からの補助金を原資として運営されている。



柏崎市公式ホームページより引用

文責 小柳陸

新潟県中越沖地震と教訓の風化

- 震災発生から5年を契機に、関連イベントの中止が相次いだ。
- その結果、震災体験やそこから得られた教訓が風化していくことへの懸念が生じている。
- 行政の積極的な姿勢が表に出ていない点に対する懸念の声が、市民の間から上がっていた。
- こうした背景を踏まえ、震災の教訓を後世に伝えていく必要性が議論されている。

文責 小柳陸

情報伝達における語り部の方法論 (テキスト P194～P196)

① 津波石碑は「経験を形にして残すもの」

- ・ 過去の津波被害や体験を石に刻んで後世に伝えるもの
→ どのあたりまで津波が来たか（具体的な高さ）
体験者の記憶など



作成者：高橋大和

情報伝達における語り部の方法論 (テキスト P194～P196)

②宮城県牡鹿郡女川町の取り組み：次世代が関わる防災

<希望のえんぴつプロジェクト>

- ・女川町では、「女川1000年後の命を守る会」を中心に中学生が社会科学習の一環で石碑設置活動が行われた。
 - 津波の頂点に石碑を建てる。（石碑の費用は、募金形式で集めた）
 - 町にある21の浜の、津波が襲って来た高さの地点に石碑を建てた。

作成者：高橋大和



新潟県阿賀町における事例

文責 丸山朝博

羽越水害

- 昭和42年(1967)8月に発生した羽越豪雨
- 新潟県北部地域を中心として死者、行方不明者134人
- 阿賀町では、旧三川村地域で18人が死亡

• 文責 丸山朝博

災害記憶の後世への伝承

- 水害の惨状を合唱組曲「阿賀野川」として歌い継ぐ活動
- 水害被害の風化を防ぐ
- 文化祭で披露し歌詞を繰り返し聞くことができる特徴

文責 丸山朝博

柏崎町形成の謎

- 戦国初期に入り、臨濟宗一山派（りんざいしゅういっさんは）の万葉集九に依る漢詩作品集である「梅花無盡藏（ばいかむじんぞう）」1488年10月9日に於いて、万里集九は柏崎方面より頸城方面へと旅路を歩むが、そこに「入柏崎カシハサキ。々々市場之面三千餘家,其外深巷凡五六千戸、深泥没股力彌微。暮鼓琴々就柏崎。民戸三千市場面。滿棚鱒尾帶潮肥」と記されるのが都市化した後の柏崎町の姿をうかがえるものの初見とされる物である。



文責 大内天斗

柏崎町形成の謎

- しかし、合計9000戸の民家があると記されている点について、仮に1軒あたり5人の居住を想定しても約45000人も人口を有する大都市ということになってしまう。「千」が「百」の記憶違い、あるいは書き間違いだった可能性もあるが、果たしてそれほどの大人数が何を生業として柏崎の町での生活を送っていたのだろうか、



文責 大内天斗

柏崎の町方としての本町の来歴

- 15世紀ごろの柏崎では、米価の高騰や凶作・飢饉、疫病などが起こっていた
- 人口が大きく減少したとされる状況もみられる
- ただし、その数値は現実的ではないと考えられる
- こうした状況の中でも、人の居住や町としての活動は続いていた

作成者：齋藤祐太

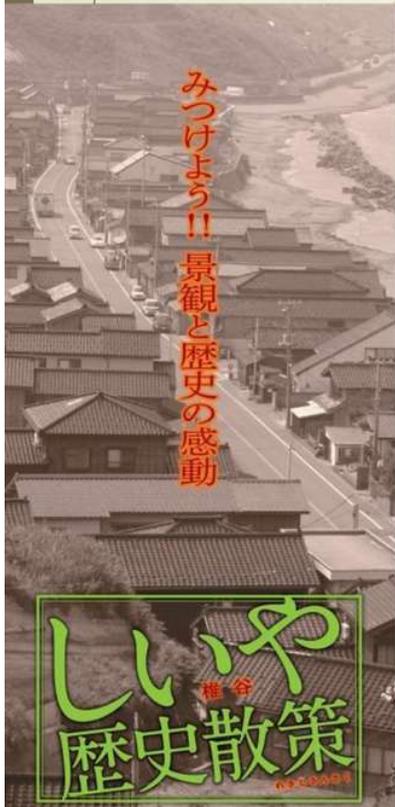
柏崎の町方としての本町の来歴

- 本町通り周辺では、15世紀の建物跡が確認されている
- 陶磁器などの生活に関わる遺物が出土している
- 鍛冶に関わる遺物もみられ、生産活動が行われていたことがうかがえる
- これらの点から、本町周辺は中世後期に町として機能していたと考えられる

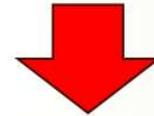
作成者：齋藤祐太

柏崎町の謎の荒廃①

※イメージ



▶ 東本町地区に西暦1400年段階において『町屋』の存在が明らかになった



▶ しかしそれが当時の町方の形成を立証することには至っていない

出典：柏崎市ホームページ

https://www.city.kashiwazaki.lg.jp/soshikiichiran/kyoikuiinkai/bunka_shogaigakushuka/5/8/6983.html



柏崎町の謎の荒廃②

▶ また発掘調査により墓地ではないかとする推定もある

→必ずしも町方の存在を示唆しているものとも判断することはできない

文責 佐藤 栄介

柏崎地域の地形図を読み解く その特徴

- ①中世期以来の地名がほとんど見当たらない
- ②地名に植物由来の文字が多い
- ③色を表す地名

文責 中村 暁希

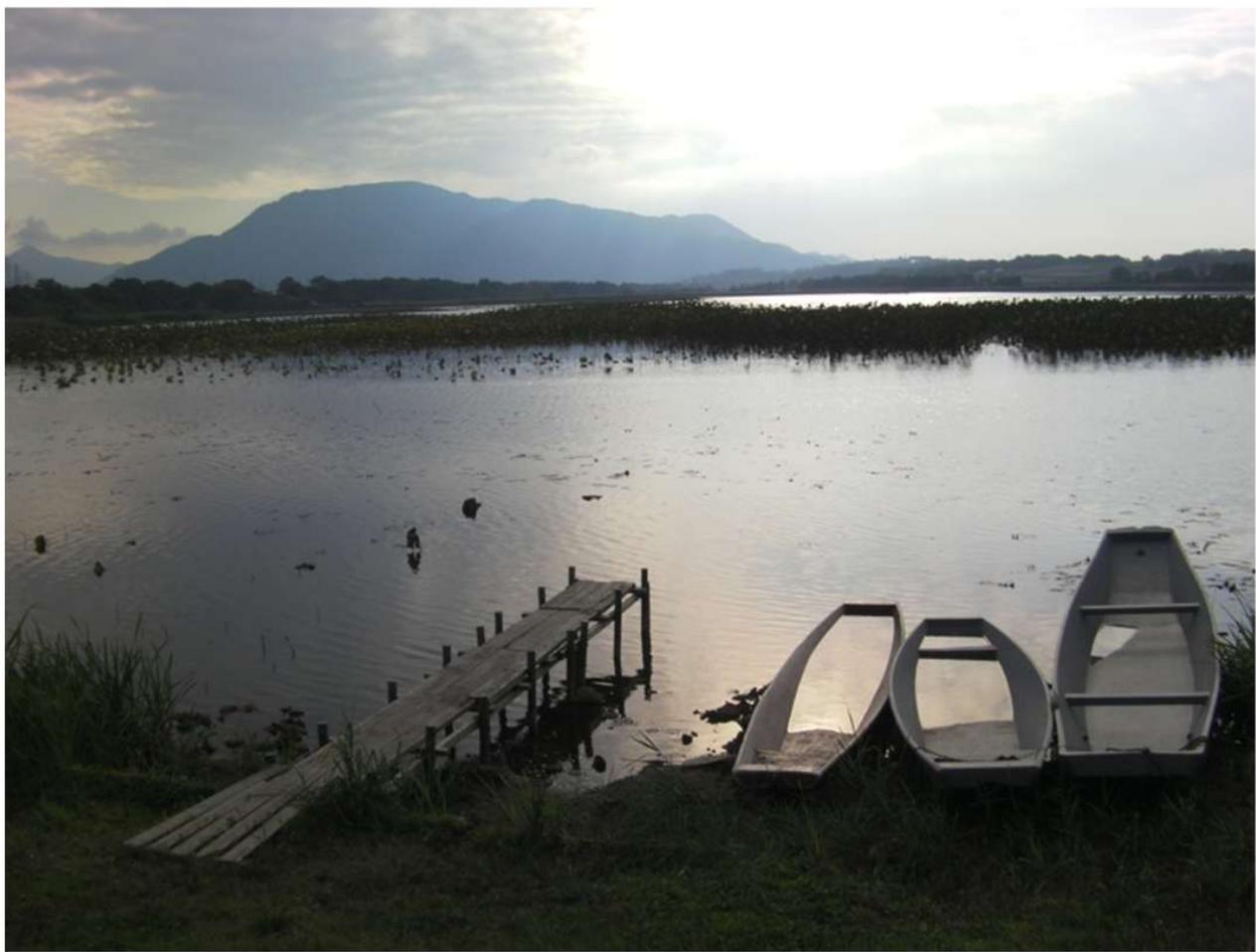
柏崎地域の地形図を読み解く その特徴

- ①中世期以降の地名がほとんど見当たらない・・・柏崎、刈羽地域のほとんどは潟湖、低温地帯や湖沼地帯となっていた可能性
- ②地名に植物由来の文字が多い・・・柏（柏崎）藤（藤井、藤橋、藤元）茨（茨目）榎（榎原）桜（桜木）松（松波、松美）柳（柳田）椎（椎谷）など
- ③色を表す地名・・・赤（赤坂）緑（緑町）など

文責 中村 暁希

参考文献表

- 小林健彦『災害対処の文化論シリーズ V ～浪分けの論理、水災害としての津波～』2016年3月初版発行、シーズネット株式会社
- 小林健彦『災害対処の文化論シリーズ III ～新潟県域に於ける謎の災害～』2015年8月初版発行、シーズネット株式会社



ご清聴頂き、感謝申し上げます！！

地域文化分野一同より